

新資料『仏説八関斎戒秘密求生浄土心要』について

木村清孝

一 昨年、韓国仏教学界の重鎮である趙明基博士の八十歳の長寿を祝して東国大学校出版部から『高麗仏籍集佚』が刊行された。題名から推察されるように、本書は数多くの稀覯書・貴重書を収載しているが、その中に、関泳珪延世大学校名誉教授所蔵の「念仏作法」と名づける「嘉靖八年（一五二九）全羅道光陽地万寿菴補刻合綴本」があり、この『念仏作法』に収められる「戒文」の一部として『仏説八関斎戒秘密求生浄土心要』（以下『心要』と略称）なる一巻本が含まれている。いささか調査を進めたところ、この『心要』が、実は八関斎儀礼史、中国浄土教史、ないし東アジア仏教史上、極めて興味深くかつ重要な資料であることが判明した。そこで、本論においては、以下に『心要』の概要を紹介し、その基本的な問題点を考察してみたい。

二 まず、『心要』の編者に関しては、表題の下に「江北僧円奕集」とあるから、円奕なる人物によって編集されたもの

として本書が伝えられてきたことは確かである。ところが、円奕なる人物は、卑見の及ぶ限り、高僧伝などの諸伝記資料には出てこない。またこの人物の肩書きも、ただ「江北僧」とあるだけであるから、江北、すなわち長江以北のいわゆる淮南道（主に現在の江蘇省）出身の僧であつたことが推測されるのみである（この問題に関しては、後に詳論する）。なお、円奕を編著者とする伝承を否定する資料はまったくない。次に、全体の内容を概観すると、初めに見出しのような形で、

一不得殺生 一不得偷盜 三不得婬慾 四不得妄語 五不得飲酒
六不得坐高广大床 七不得歌舞妓樂故往觀聽、及著香熏衣服
八不得過午食

と、八関斎戒名が挙げられる。この名目は、現存する諸文献の中では、一〇～一一世紀ころのものと推測されるS四〇八一にもっとも近い³⁾（ただし、同書では第六・第七は順序が逆になる）。

次には、八閼齋戒の実行法が簡潔に述べられる。すなわち、

其八戒者、從今清旦、至明清旦、一日一夜、不得犯此。其齋之日、澡浴塵垢、著新淨衣、先誦淨法界真言^七、次誦淨三業^三、次誦千手五^遍、嚴淨道場、然後皈依三宝^三、次廻施偈^遍。

諸仏正法菩薩僧 直至菩提我皈依
我以持戒諸善根 為有情故願成仏
能或施人或施善 所獲一切諸功德
猶如幻化似夢境 三輪体空悉清淨
廻施已、或靜坐、或誦經、或持呪、或念仏、或作務、隨意。齋戒日期、具載下文。依法受持。

とある。本書の表題中に「秘密」の語が含まれているが、まさしくそれに呼応するように、ここには(1)淨法界真言(om raṇ) (2)淨三業(om svabhāva-suddhāḥ sarva-dharmāḥ svabhāva-suddho 'ham') (3)千手(大悲心陀羅尼?)を誦するという密教儀礼が導入され、しかも全体としては、延寿(九〇四〜九五)の「万善同歸」「万善生淨土」の思想を受け継ぐと思われる、あらゆる仏教実践を肯定する立場が宣揚されているのである。とくに、念仏が単にそれらの中の一つとして、随意に行なわれるべきものとされていることは、本書の表題中にいわれる「求生淨土」が必ずしも念仏を不可欠とはいえないことを表している興味深い。

新資料『仏説八閼齋戒秘密求生淨土心要』について(木村)

第三には、「齋用齒木澡豆利益部」が立てられる。後述するように、本書は内容的にも組織の仕方についても、道世の『法苑珠林』の影響を大きく受けているが、この一節だけは『法苑珠林』になく、内容もまったく新しい。引用される文献は、『寄皈伝』『大威儀請問經』『薩婆多論』の三部であり、合わせてとくに口中を清潔にすべきことが説かれている。日本の道元(一一〇〇〜五三)の「洗面」の思想^④と対比・検討されるべきものといえよう。因みに道元は、留学当時、すでに中国では楊枝をだれも知らなかったと報告している。

第四節は「会名功能両部互頌」と題され、下に、
法苑珠林百卷、西明寺沙門道世撰。

此下戒文、第八十七八九三卷中皆出也。

と割註がある。実際にはこれは誇張で、すべてが『法苑珠林』の八七巻以下の三巻に出ているわけではなく、その記述の選択・増補・訂正によって本節は成り立っている。この点は、下の第五節「引証部」、第六節「述意部」、第七節「優劣部」(末尾)も同様である。

次に、それら各部の本文の大半を占める引用文の典拠名(人名を含む)を記してみる(括弧は典拠名が明記されないもの、棒線は『法苑珠林』の引用文の転用であることを意味する)。

(法苑珠林)・智度論・教主応化図・提謂經・四天王經・(法苑珠林)・四天王經・淨土經・正法念処經・育王經・仁王護國經・毗

新資料『仏説八閼齋戒秘密求生淨土心要』について（木村）

羅三昧經・薩婆多論・四分律・尼鈔・智度論・博物志（以上、第四節）

健陀國王經・雜譬喻經・護淨經・寒山集・梵網經・楞嚴經・環

師・月燈三昧經・智度論・法華經・司馬溫公（以上、第五節）

（法苑珠林）・智度論・華嚴經・薩婆多論・涅槃經・祖師・道安法師・雲峯祖師・伝燈錄（以上、第六節）

增一阿含經（第七節）

これらの引用の中には、不明のもの、未詳のものも存する。しかし全体的に見た場合、とくに、①『法苑珠林』そのままでは決してなく、また宗派性が極めて薄いこと、②民間への仏教の浸透を図る偽経類の引用が目立つこと、③正統的な浄土經典はまったく引用されていないこと（第四節の『浄土経』は偽経である）、などが注意される。

このほか、第五節では文末で遠法師（慧遠）、道法師（道安）、天台智者（智顗）、清涼国師（澄觀）、晤恩らの「不過中食」（午后には食事しない）を遵守する態度に言及し、讃えてもいる。これらのことは、本書の編著者がいわゆる宗派的な枠組みにはほとんど執われていないことを示しているよう。

最後に一言すれば、以上の概観を踏まえて考えるとき、その表題は、「仏が説かれた、八閼齋戒という、秘密の、浄土に生まれることを求めるための、心要」の意であると解釈される。本書の狙いは、あくまで八閼齋戒の敷衍と宣布にある。

り、浄土ないし天界への往生は、それを実行する結果として約束されるものであったのではなからうか。

三では本書は、いつ、どこで、どういう人によって著わされたのであろうか。

まず成立年代に關しては、「司馬溫公云く」として、忿怒如烈火、利欲如鋸鋒、終朝長戚戚、是名阿鼻獄。顏回安陋巷、孟軻養浩然、富貴如浮雲、是名極樂國。孝悌通神明、忠信行蠻貊、積善來百祥、是名作因果。言為百代師、行為天下法、久、不可掩、是名不壞身。仁人之安宅、義人之正路、行之誠且久、是名光明藏。道德修一身、功德被万物、為賢為大聖、是名仏菩薩。

という一文が引用されていることが、もっとも注意される。司馬溫公とは、王安石の新法党に対抗した旧法党の党首で、『資治通鑑』の編者でもある司馬光（一〇一九～八六）のことであるが、地獄も極樂も現世における生き方の表現にほかならず、仏・菩薩とは道德を身に修め、功德を万物に及ぼす人のことである、とするこの文の出所を筆者はいまのところ見出していない。しかし、かれが仏教について一定以上の知識をもち、有益性を無視できない一つの処世法、あるいは人生哲學として仏教を捉えていたことは間違いない。ただ、かれにこれほど踏み込んだ仏教理解があったかどうかについて

は、若干疑問が残る。

ともあれ、本書に「司馬溫公云く」として上の一文が引用されているということは、本書の成立が、司馬光に「太師溫国公」の称号が贈られたその没年（一〇八六）以後であること、さらには、かれの死後から北宋末（一二二七）まで再び新法党が勢力を獲、かれは官をおとされたから、その名譽が回復された南宋代（一二二七～一二七九）の初め以降である可能性も存することを示している。しかし、本書の成立年代をあまり下げることにも不自然である。というのは、本書に言及される仏教者の中で、年代の明確な人びとのうちもっとも遅い人は、延寿（九〇四～九七五）と晤恩（九一二～九八六）であるからである。一一世紀に活躍する知礼（九六〇～一〇二八）・遵式（九六四～一〇三三）・智円（九七六～一〇二二）・重顕（九八〇～一〇五二）・契嵩（一〇〇七～一〇七二）など、およびかれら以後の仏教者や文献には、おそらくまったく触れられていないのである。

ここで考えておかねばならないことは、『心要』ははじめ「司馬溫公云く」の部分で欠く形で成立し、あとでこの部分が付け加えられたのではないか、という疑問である。「司馬溫公云」の語が、「述意部」などと同じく見出しのように行取りで掲出されていること、当該の部分が必要しも前後の文とつながりがよいとはいえないことも、この推測を

新資料『仏説八閼斎戒秘密求生淨土心要』について（木 村）

助けるものであると見ることもできよう。

編著者とされる円奘の伝記がまったく不明である以上、上の推測の可否をはっきりさせることはできない。それゆえ、成立年代に関しては、現在知られる範囲では次の二つの可能性を認めておくほかはあるまい。すなわち、

- (1) 一〇世紀末～一一世紀初めころ、円奘が『心要』を編集し、これに一一世紀末、あるいは一二世紀の前半ころに誰かが「司馬溫公云」の部分（あるいはその他の若干の部分をも）付加・修訂した。その結果、現在の『心要』となった。

- (2) 一一世紀後半～十二世紀前半ころ、円奘が現在の形の『心要』を編集した。かれが一一世紀の代表的な仏教者たち（前述した知礼など）に言及していないのは、かれらを評価していなかったか、知らなかったためである。のいずれかである、ということである。

では次に、『心要』はどこで出来たのであろうか。この問題は、本書が朝鮮半島に伝わっていること、「江北僧円奘集」という撰述者名があること、および、本書全体の思想的性格から考えなければならない。

まず、本書は李朝（朝鮮）代の嘉靖八年（一五二九）に全羅道で刊行された書物の中に収められているということから、高麗かあるいは李朝で生まれたのではないかと推測される。

しかし、すでに諸研究^⑧によって明らかにされているように、半島における八閼齋会は、その民族信仰や民間習俗と習合しつつ、「天靈、及び五獄の名山、大川の竜神」に事える護国のための国家行事として高麗代に完成される。つまり、それは、インドや中国の八閼齋会とはまったく違ってよいほど急速に質を異にしていくのである。ところが、すでに概観したように、『心要』はあくまで伝統的な立場に立って八閼齋戒の重要性、根本性を宣揚している。それゆえ、本書が半島において高麗代に作られたということは考えにくい。また李朝の成立（一三九三）以後に現れたということも、儒教国家としての李朝の基本的な性格、本書に朝鮮仏教関係のものがまったく引用・言及されていないこと、実際に引用・言及されているものとの年代的なギャップの大きさなどに照らして、ありえそうもない。また、編著者名に付される「江北」という地名ないし方角名が、朝鮮半島においておそらく一般には用いられないことも、本書の朝鮮半島成立説にとっては不利な材料である。やはり本書は、中国の「江北」（淮南道）の僧円突によって編集されたと見るのが自然であろう。

では編著者の円突とはどういう人物で、「江北」は何を意味するのであろうか。思うに、円突が一山の、とくに大寺の住持であったとしたならば、おそらくその肩書には少なくとも山名か寺名が記されたはずである。それがなく、「江北僧」

とあるのみであるということは、かれが住持の職にあったのではなく、単なる一介の修行僧、あるいは寺を捨てた遁世の僧であったことを意味するのではなからうか。とすれば、「江北」は円突の居住地ではなく、出身地を表すと考えるべきであろう。本書の中では、齋戒・持戒の重要性・根本性の強調と表裏をなすように、齋戒を軽視し、あるいは否定して禅道を説く禪者に対して、

噫、今有輕毀齋戒、自称大乘者、強將美酒食、勸与持齋人、上障仏之光明、下破人之功德。如斯一類、求墮三塗。假使大通大徹、談道談禪、開口則魍魎舐咽、行歩則鬼神掃跡。莫言九族望生天、一子出家、九族生天。帶累二親、先入獄。

という厳しい批判がなされている。思うに、このような批判は、おそらく仏教界の組織の権威ある地位から一定以上の距離を保つところに身を置いてはじめて可能であつたろう。

では、円突の宗派的な系譜はどうか。もちろん、時代はすでに宋代であり、いわば中国仏教全体がすでに総合仏教、融合仏教の性格を強めていたのであるから、厳密な意味でその宗派性を問うことはできないし、また問う意味もあまりない。しかし、本書を通じて窺われる編著者像としてとくに注意を惹く点はいくつかある。その第一は、全体として己心淨土論、齋戒第一主義と集約できるような禅的な立場が濃厚に示されていること、第二は、すでに述べたように密教儀礼を

積極的に導入していること、第三は、天台智顗らと並んで、華嚴宗の澄観、および天台宗山外派の祖暗恩の言行を賞讃していること、第四は、齋戒に際して齒木・澡豆の使用を提唱していることである。これらの点を中心にして、大胆に円奩の系譜を推測すれば、かれは、雪峯義存——法眼文益——永明延寿の流れを汲む禪者か、天台宗山外派の僧であり、いずれに属するにしても、もう一方の系譜に対してかなり親しい関係に立っていた、と考えられるのではなからうか。

四 以上、新資料『心要』の概略を紹介し、その年代や編著者について一応の推定を試みた。中間報告のようなものではないが、これをきっかけとして本書の研究が深められることを切望したい。なお、いうまでもなく本書をめぐる問題は、上述した範囲に限られるわけではない。とくに、本書がどういう経緯で一六世紀に李朝において刊行されるに至ったのか、その目的は何であったのか、という問題は是非とも究明されるべきものであることを付言しておきたいと思う。

1 本書全体の構成は次のようになっている。序(道世跋)『法苑珠林』八八、受戒部・五戒部・述意部第二・仏説八閻齋戒秘密求生淨土心要・十王經・天台末学雲然和尚警策・八滌聖解脱門・挙現事以斥妄行・為僧不預於十科事仏徒消於百載・釈門登科記序・明教嵩禪師尊僧篇・慈雲式懺主書紳。これによって、本書が契嵩(一〇〇七―一七二)や遵式(九六四―一〇三二)以後のものであることが分かる。

新資料『仏説八閻齋戒秘密求生淨土心要』について(木村)

2 土橋秀高『戒律の研究』(一九八〇年、永田文昌堂)七七二―七七九頁参照。

3 「千手」(本文は「千手五遍」となっているが、この中の「五」は、誦出の回数を示すもので、正しくは「千手遍」であろう。『千手五……』と略称できる真言名や經典名もなさそうである。)を『大悲心陀羅尼』と推測する理由は、①諸訳の同経の名称が、いずれも「千手千眼觀世音または觀自在菩薩」の語を冠すること、②不空訳とされる『大悲心陀羅尼修行念誦略儀』の冒頭に(2)の「淨三業」の真言があり、③延寿以来、『大悲心陀羅尼』の日常の儀礼への組込みの試みが進みつつあったこと(知礼による大悲懺法の組織化は、その代表的な成果であると考えられる)、④他に「千手」に相当すると思われるものが見当たらないこと、などである。

4 『正法眼藏』(七五卷本)第五〇「洗面」参照。

5 例えば司馬光は、「仏書の要は空の一字に尽くるのみ」とし、楊子の厭世觀との類似を指摘した上で、「釈老の道は皆、宜しく憂患の用を為すべきか」と論じている(『書心経後贈紹鑒』、『司馬溫公文集』六九)。かれは「空」の意義を、おそらく「憂患」の結果として、利欲を離れた善心が涵養されてくる点に見ているのであって(『釈老』、同、七四参照)、それ以上のもではなさそうである。

6 里道徳雄「朝鮮仏教における八閻齋会考―その歴史的展開―」(西義雄博士頌寿記念論集・菩薩思想)昭和五十六年、大東出版社、二七五―二九七頁)、同「高麗仏教に於ける八閻会の構造」(『東洋学研究』一七、一九八二年)、洪潤植「韓国仏教儀礼の研究」(昭和五一年、隆文館)一四〇―一四三頁など参照。

7 「訓要十条」(『高麗史』二、世家二、太祖二十六年癸卯条)。「訓要十条」が実際には顯宗王代(一一〇一―一一三二)前後の成立であることについては、今西竜「高麗太祖「訓要十条」に就きて」(『高麗及李朝史研究』、昭和四十九年、国書刊行会、二三―三二頁)参照。(東京大学助教授・文博)